

佛心

二〇二三年九月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



如来の

おてまわし

今年7月は、盂蘭盆会（お盆）の法要をご縁に、仏さまそしてご往生された有縁の方々に合掌をさせていただきます。

日本ではお盆の時期になると、ご先祖さまが彼岸（浄土）から此岸（娑婆世界）に還ってこられるといわれています。

そのことを喜び、盆踊りをする風習は日本独自のものかと思われます。亡き人が還ってこられることはとても嬉しいことです。しかし、お盆の時期が過ぎて、また往かれてしまうことは少しさびしいことでもあります。

ただ浄土真宗では、お盆の時期にかご先祖さまが還ってくるとは言いま

せん。先立たれた念仏者はみな、阿弥陀如来の浄土へ往生し、仏さまとならせていただきます。

それは阿弥陀如来と常に一緒にいる仏さまになるということです。その仏さま方は「南無阿弥陀」の念仏を通して、私たちのところにもいつでもどこでも至り届いてくれています。

今年の初盆法要は、長らく続いたパンデミックの影響もあり、多くの方々が参列されていました。大切な人を亡くす悲しみからこの世の理を知り、そして仏教に出遇われた方もいらっしやいました。

この世の理を知るとは、私もこの世も常では無い、「無常」を知ることです。そして、仏教に出遇うとは、如来の死では終わらせない世界のお手回しに出遇うということなのです。

私事ではありますが、二ヶ月ほど前に実家から電話がありました。電話に出る

と、父親が出張先のお寺で倒れたというのです。父は病院へ搬送されて緊急手術を施され、しばらく入院していましたが。いまは元気に実家のお寺へ戻られたようです。

しかし、電話を受け取ったとき、私の頭の中で「もしかしたら・・・」と嫌な予感がよぎりました

たった三ヶ月前、日本出張の際に会ったばかりなのに、もしかしたらあれが最後の挨拶になっていたのかもしれない。そう思うと、もう少し愛想良くしておくべきだったなあ・・・とか、ゆつくりと話す時間を作れば良かったなあ・・・とか考えるわけです。

突然の別れというものは、年を老いた人だけに起こることではありませぬ。私自身も事故や病気などで、いつでもどこで何が起こるか分からない無常の身であります。

明日にはどうなっているか分からない身であつたと改めて知らされるとき、蓮如聖人のお書きになられた白骨章の一文をいつも思い出します。

「朝（あす）には紅顔（こうがん）ありて、夕べには白骨となれるみなり」

紅顔とは、血色の良いつやつやした顔のことで、元気なことを表します。ですから、朝に「行ってきます」と出かけられた人が、夕方には、亡くなられて帰ってくるかもしれないということとです。

この言葉を初めて習ったときに、京都でお世話になっていた先生から言われた言葉があります。

「人は生死（しょうじ）を時系列として考える癖がある。そのためよく、私たちは死に向かって生きていると勘違いをしている。でもな、大内くん、人間は死に向かって生きているんじゃない。私たちは、死を背負っていきっているんやで」と言われました。

私も僧侶として様々な別れの場面に立ち合わせていただきます。それらの場面を通して、「私は無常の世界に生かされているのだ」と強く訴えかけられます。

そして、先ほどの先生の言葉、「死を背負って生きている」を、ここらに留めておくことが大事だと思うのです。なぜなら、そのことで生死を超えた頼りとなるもの、別の言い方をすれば、本当のこのころのより所をなめるものに出遇うことができるからです。

私もそうですが、人間は生きることと美化する傾向があります。なぜなら、生きることによって将来への目標が生まれ、その目標が希望となり、生きる喜びになるからです。

しかし、そのことを考え詰めると「生きているうちはいいが、死んだら目標も叶わず、希望もなにもない。死んだら終わり」という答えに陥ってしまいます。なぜなら、私たちの娑婆世界での目標も希望も、生きているうちにしか抱けないものだからです。

しかし、仏教では『死では終わらせない世界のお手回し』があることから「死んだらおしまい」なんてことは、一切考えません。

仏教では、「死」を涅槃（ねはん）や往生（おうじょう）という言葉であらわします。涅槃とは一切に煩惱が打ち消された状態で、往生とは字の通り「往って生まれる」と書きます。

「往く」という字には、目的に向かっていくという意味があります。私たち仏教徒の死後の目的とは何か？娑婆世界の理を超えた浄土に生まれ、仏になることです。

そして、如来のお手回しによって、みなが同じお浄土に生まれさせていただく。そのことを「俱会一処（くえいつしよ）」といいます。

俱会一処とは、「俱（とも）に一つの処（ところ）で会（あ）う」という阿弥陀経のご文です。つまりは、同じ阿弥陀如来のお浄土でまた共に会わせていただくという意味です。

数年前に、この俱会一処について印象的な出会いがありました。それは、医者から余命宣告をされた女性の臨終勤行（俗にいう枕経）を行なったときのことでした。

その方は、死の間際ではなく、意識あるうちの臨終勤行を望んでおられました。彼女は私と同郷の大大出身で、夫をずいぶん前に亡くされていた方でした。

彼女は「先生、私はもう長くないっち。もうすぐ私も仏様のもとへ行くけん、あの人（夫）もこれで寂しい思いをせんやろうっち思っちゃる。」と涙を浮かべながら言っていました。

当時の私は、励ましの意味を込めて「父さんは先に浄土へ生まれさせてもらったけん、大丈夫、寂しくないっちや」と言いました。

すると彼女は、「いや、あの人は絶対に寂しがっちゃよんよ。だって私はあの人を失ってから、ずっと寂しいかったけん。あの人は私の気持ちをよく分かっちゃう人やった。だけん、この私の寂しさも伝わって、きつと私と同じように寂しがっちゃよつると思う。」と言っておられました。

このお母さんは、先ほどの「俱会一処」の言葉を知ってか知らずか、お父さんと同じ阿弥陀如来のお浄土に生まれることを喜んでいました。

さらに、仏様の慈悲のこころである「同じ気持ちに立ってくださる慈しみ」を先立たれた父さんを通して感じられていたように思います。

なんともありがたい仏さまとの出会いを、その方を通して私も合掌させていただきました。

「人間はいつか死ぬ」これを頭では分かっているても、なかなか受け入れることができないのが私たち衆生です。

しかし、仏さまの「死では終わらせない世界のお手回し」に出遇った私たち衆生は、生死を超えた頼りとなるもの、本当のこころのより所となるものに合掌させていただいています。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真

今年のお盆は、ご講師としてカルガリー仏教会に着任されているロバート・グベンコ師を招きました。二日間に渡る、お墓参り、JCCC法要、初盆、盂蘭盆会法要(英語・日本語)、と刻みのスケジュールを一緒にお勤めして下さいこと、仏教会を代表して、改めて御礼申し上げます。



Rev. Robert Gubenco



Toronto Cemetery Services



JCCC Bon-Odori



TBC Obon Service



ファームで命日法要



法要後にグベンコ先生と



カルガリー仏教会のご本尊

トロント仏教会のお盆法要後、カルガリー仏教会のお盆にゲストミニスターとして向かいました。
仏法聴聞に熱心な方々ばかりで、大変ありがたいご縁をいただきました。



今年もお寺のコテージで、サマーキャンプを開催しました。
今年から新しくカウンセラーになった子たちもいて、一生懸命にキャンパーたちの面倒を見てくれました。感謝感謝



祥月法要のお知らせ

2023年9月ー10月

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：9月10日 10月1日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

※9月は例年通り第二日曜日が祥月法要となります。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbcc@tbcc.on.ca>までお知らせください。

寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。

